

# 中国における日本研究について

駱 為 龍 (中国社会科学院日本研究所)

Luo Wei Long

## 一、

60年代に入ってから日本問題は世界の多くの国々に注目されてきた。中国だけではなく、欧米や東南アジアの諸国もさらに日本研究を重要視するようになってきている。研究機関と研究者人数はいちはやく増強されつつある。そして、日本研究の成果も数多く発表された。80年代以降、世界の多くの国々と地区では「日本研究ブーム」があらわれ、かつてなかった高揚期を迎えている。

中国が世界では最も古くから日本について記述し研究した国である。中国歴史学者の研究によると、最初に「倭」について記載した書籍は、中国古代の地理書『山海経』である。その中に、4篇は前漢初期の作品といわれている。晋の太康10年（公元289年）に陳寿に書かれた『三国志』から日本についての正式な「伝」が格上げられた。それが『魏志・倭人伝』である。それにより日本は中国人の研究範囲として正式に組み込まれてきた。3世紀の『三国志』から20世紀の『清史稿』まで、大多数の中国正史には、『倭人伝』、『倭伝』、『倭国伝』、『日本伝』、『日本志』などと書かれている。一つの国では日本伝を一千数百年も書き続けてきたのは世界でもおそらく中国しかないだろうと思う。

中国における日本研究は歴史が長いことだけではなく、いまの研究者の人数も世界で一番多いのではないかと私は思う。1986年福岡ユネスコ協会が主催した第3回日本研究国際セミナーに発表された資料によると、世界では日本研究に携わっている研究者人数は4030名である。その中にアメリカは1200名で、中国は1130名である。昨年始め頃に中国で日本研究に携わっている研究者人数はもう1500名前後に増加したとわたしたちは予測した。若し数百万の日本語を勉強している者を考え合わせると、中国は「日本研究大国」と言ってもおかしくないだろうと思う。

しかし、問題は他国とくらべて、中国における日本研究のレベルはどうなっているかにある。それは真剣に考えなければならない重要な問題であると私はそう思う。この問題を深く議論する必要もあると思う。

## 二、

中国における日本研究の歴史は長くて曲折にみちたものである。それをかえりみると、全面的に日本を理解し深く日本を研究するのはそれほど容易なことではないとしみじみ感じている。新中国が成立した初期、政府は非常に日本研究を重要視していたが、当時にはいろいろな条件に制約され、活発な研究になれなかった。政府部門をのぞいて、日本研究に携わっている人はわりに少なかった。そしてばらばらであった。研究者の中に多くの方々は解放前日本研究あるいは日本語授業に携わって来た人しかなかった。中日両国間の不正常状態はまだ終止符をうたれなかった

ので、人的往来が基本的に中断され、日本に関する資料などは極端に欠乏していた。アメリカの対日単独講和条約、「日台条約」の反対闘争から1958年に長崎で中国国旗侮辱事件がおり、日本との輸出入貿易と人的往来は全部断絶されるまで、中国における日本研究活動はより一層困難になったが、各研究機関はさまざまな困難をのりこえて、多くの研究活動をつづけて、国のニーズにこたえることができた。もちろん、歴史的な条件に制約されていたので、当時の日本研究にある程度の局限性をもたざるをえなかった。60年代に入ってから、世界情勢の変化にしたがって、中日両国人民の往来は日ましに頻繁になり、とくに日本経済の高度成長は人々に強い関心をよびおこした。毛沢東主席の「外国問題研究を増強せよ」という提案にもとづいて、関係部門は積極的に日本問題をふくめて数多くの国際問題研究所をつくり、日本研究に携わっている研究者も日ましに増え、よろこばしい研究成果ができた。これが非常に注目すべき変化と言えるだろう。ところが、まもなくいわゆる「文化大革命」が勃発し、全国は大動乱になった。中国におけるすべての日本研究機関はほとんどパニック状態におちいった。

中日両国国交正常化は中国における日本研究事業の重要な契機でもあった。国内外条件が大きく改善され、元来の研究機関はあいついで復活し、若干の新しい研究所もつくってきた。それにもかかわらず、当時、まだ「文革」の動乱期におかれていたので、あまり正常でない政治要因は人びとの思想を制約し、正常に日本研究活動を展開することができなかった。例えば1973年から1978年までの6年間に、新聞や雑誌に発表された日本研究に関する論文は、年間平均2、3篇しかなかった。そして日本に関する書籍は年間平均2種しか出版されなかった。

### 三、

中国における日本研究事業は全面的に復活し、発展することができたのは中国共産党の十一期三中総会以後のことである。中国共産党は全国活動の重点を四つの現代化の実現に移すことを決定した。それを実現するためにとられた政策は対外的な開放、対内的な改革を通じて、各国の先進的な科学技術を取り入れ、外国で有効に運営されている管理制度や方法を参考することである。こうした面で発達を遂げている日本を研究することに目が向けられ、ふたたび日本研究ブームがあらわれた。日本経済成長の「奇跡」のなぞを解明することはその焦点である。中国の日本研究者たちはいろんな側面から日本経済の高度成長の原因を分析し、その経験や教訓を研究して、さまざまな形で学術シンポジウムを行い、日本学界との交流もますます活発になった。数多くの研究者が日本へ視察や研修に行き、あいついで日本実態をわりあい正確に反映できる論文や著作や訳作を発表した。調査によると、1950から1981年までの31年間に全国で新聞や雑誌に発表された日本問題に関する論文は5084篇に達した。その中に約三分の一は「文革」以後発表されたものである。中国における日本研究活動は正常な道をあゆみはじめた。研究分野はしだいにひろく開拓され、政治、経済、民族、文化、歴史、哲学、宗教、文化、社会、軍事などの多種類学科におよんで、研究の広さと深さもともに進んでいた。客観情勢の発展は日本研究を一步前進させ、一つの総合学科まで成長するようにと要望してきた。このような歴史的背景の下に中国社会科学院日本研究所は1981年5月1日発足した。日本研究は一つの学科として中国社会科学院の研究分野に入った。さる10年間に日本研究所だけではなく、院内の他の研究所にも日本研究に携わっている研究者が著しく増えた。最近の統計によると、中国社会科学院全体では日本研究を行ってい

る研究者の人数は151名に達しており、約全国の十分の一を占めている。

ここ10年間、中国における日本研究は確かに稀にみる高まりをみせてきた。1988年1年間では、発表された日本に関する人文社会科学方面の論文は1150篇で、著作は65種、翻訳作品は273種があった。70年代始め頃とくらべると、雲泥の差と言える。いままで発表されたさまざまな研究成果からみると、人々の日本に対する認識は日ましに深入し、全面的なものになり、一般的な紹介と分析でもう満足できなくなり、次に中日両国の比較研究をやったり、歴史の過程に深入して伝統文化と現代化の関係や日本人の価値観や政策決定に関連する諸要因をさぐったりしている。その中非常に学術的価値の高い著作や論文も含んでいる。中国の国民経済を發展させる第6回5カ年計画の期間に、国家社会科学基金の助成の下に、全国の関係する日本研究機関の研究者は大規模なチーム・ワークが二回進んだ。まず8カ所の研究機関の研究者が協力して戦後日本シリーズを刊行した。それにつづいて、19カ所の研究機関の協力で、日本發展の見通しを研究した。最近、中国社会科学院日本研究所と関係する研究所の協力で、中国の初めての日本年鑑である『日本概覽』を全国に発行した。

もちろん、このようなすばらしい情勢の下に私達は若干の不足と欠陥を冷静にみきわめなければならぬ。おおざっぱに言えば主な表現は(一)基礎理論研究や総合研究はわりに少ない、一般的な紹介と個別の問題に対する分析は多く、研究の深さと広さの面ではまだ足りない点が多い。基礎的研究が弱いので、それがすでにより一層日本研究をおしすすめる障害になりつつある。(二)学科配置の上にある部分にかたよるアンバランス現象が存在している。例えば、一時期に日本経済研究にあまりにも力をいれすぎたありさまであった。中国の四つの現代化建設の必要性から考えると、日本経済成長の過程の中に出てきた諸問題を研究することは疑いもなく必要であるがこの分野の研究幅は狭く、ほとんど現状分析や産業構成や財政金融と科学技術政策などの方面に集中されている。しかし、日本経済の全体に対してマクロ的な研究がまだ不十分である。そして文化伝統成長にもたらした影響に対する研究なども弱い。周知のとおり、日本経済の高度成長は多方面の要因でできたものである。すなわち、歴史と現実や政治と経済や精神と物質や国内と国外など諸要因の統一で、非常に複雑な一体化されたものである。若し視野を広く開拓しなければ、日本経済を日本の国家政策の中にさらに資本主義世界全体の中において、観察し分析しなければ、多分その真髄をみにつけることがむずかしいと思う。(三)いかに日本を分析し、認識するかに関しては、ある程度の表面性と一方性が存在している。時に一つの極端からもう一つの極端に走ったり、現実だけを注目し歴史的要因を無視したりすることや、一時的な表面現象だけを見て、より深い本質に対する分析をみのがしたり、成功した経験だけを強調して、失敗した教訓を重視しなかったりすることなど、だから一時的な雰囲気左右されて、自分の見方が動揺しやすい。時にはある説を迎えたり固定的なパターンから出発し反証的な論証をしたりして、まったく主観と客観との関係を逆転した。あきらかにこういう研究方法を取るなら日本を研究し認識する上に役立たないと思う。とにかくいかにマルクス主義の基本理論を指導原則とし、弁証唯物主義と歴史唯物主義認識論と方法論を活用して、日本の現在、過去とその未来を全面的に深く研究するのが中国の日本研究者の前によこたわっている重大な使命であると同時に、いままでの表面性と一方性を克服する基本的なアプローチであると私はかたく信じている。

#### 四、

日本は西側の国であると同時に東方の文化伝統を持つアジアの国でもある。戦後日本の発展は、資本主義発展の共同法則をもちながら、歴史や民族や文化と国際環境などの原因で、また自分自身の特殊性を持っている。欧米諸国とはちがって、過去と現在に中国と密接な関係を保っている。中国と二千年以上の友好往来を持ちながら、数十年にわたる侵略戦争の歴史も持っている。このような特殊性と複雑性は中国における日本研究に独自の風格をもたらしている。私たちは日本研究をおしすすめる時には欧米諸国の日本学研究のパターンを機械的にはこんではいけないで、中国における日本研究の経験と教訓を吸収する上に日本研究の理論と方法をさがして、中国的特色のある日本学を建立し、発展すべきである。これはすでに日本研究に携わっている全国の学者と専門家たちの共通した関心事である。

中国の学者は日本学研究をおしすすめる時に国家の需要を考えて、中国の社会主義的改革と建設に奉仕しなければならない。この目標を実現するために広汎な応用研究が必要であるが、日本学研究の全体として考えればこれだけではまだまだ不十分である。私たちは基礎研究を大きく増強すべきだと思っている。応用研究は基礎研究に根をおろさなければならない。それを通じて応用研究の質が高められる。それにひきかえて、応用研究を通じて基礎研究を促進することができる。具体的に言えば、私たちは研究の着眼点を日本の政治や経済や社会と文化などすべての分野の基本状況つまり長期的に日本に作用できる基本的な要因を系統的に研究しなければならない。こうすればさまざまな動きを正しく判断することができる。ただ「何であるか」に答えることができるのではなく、また物事の背景やその内在的なつながりおよび発展の法則などの要因から、「なぜ」と「どうなるか」というより深い回答を出すことができる。こうすればこそ、日本と日本社会を深く理解することができ、日本研究の質も高められる。中国の日本学の研究方向として、ただ当面に必要な実用的研究に満足すべきではなくて、もっと長い目で日本学の基礎研究面の建設およびそれぞれの学科の合理的な配置をよく考えて、次第にしっかりした基礎をもつ、学科がそろっている日本学システムをつくらなければならない。

日本を研究する場合には正しい理論指導と科学的方法が必要である。ここ数年間、研究者の中にマルクス主義の認識論をみにつけることをみのがしている人もいる。だから時に一方的な認識や形而上の傾向ができてくる。戦後の日本は確かにいろんな面で参考できる所は少なくないけれども、これらの問題を研究する場合に、ただ方針や政策などの書類だけでは不十分である。それを実践にうつす過程の中におつかった問題をも研究すべきである。日本の経験を「理想化」してはいけない。私たちは多方面から日本の経験と教訓を研究して、中国の国情をむすびつけて選択的に吸収すればいいとおもう。「日本経済の奇跡」の背後にいろいろな矛盾と歪みがひそんでいる。それらの問題は資本主義制度自身から生れたもので、その社会制度で克服できないものもある。若し正しい立場、観点と科学的方法がなくて、また日本社会に対する理解が浅くて、真剣に分析しなければ、あわてて論文をかいたりすると、彼らの研究は表面現象の上にごるぐるとまわることしかできなく、物事の本質をみきわめられない。ある学者は日本問題を研究する場合につきの「三性」を堅持すべきだと主張している。つまり、「階級性」——階級と階級分析の分析の方法で日本社会のさまざまな現象を分析して、社会の表面現象と本質の特徴を区分し、各種類の社会

現象の階級的内容を区分することである。「民族性」——一般の資本主義とちがった日本資本主義の独自の法則を重視して、共通性の中に個性をつかまえることである。「時代性」——硬化された観点で日本を見ないで発展と変化の観点で日本を分析することである。こう言う表現は適当かどうか議論する余地があるけれども、それは確かに長期にわたる実践の中につみかさねた経験の総括と言えらるだろう。

日本社会の中で起こったいろいろな動きに対して、若しその性質、特徴および発展の形式に左右される内外のつながりを総合的に研究し、分析しなければ、科学的判断をくだすのが非常にむずかしい。いうまでもなく、複雑な事情を系統的に研究するために、まず広汎に多くの資料を占有し、こまかい調査研究をしなければならぬ。日本は情報過剰の社会であり、毎日マス・メディアを通じて出された情報は世界でも数量が一番多くて、スピードも一番速いと言えるかも知れない。しかし、これらの報道の中に、物事の本来の姿を正しく反映するものがあるが、いろんなイデオロギーや政治傾向などをまじえたものもある。日本学術界の中に流派が多く、学術理論と観点もさまざまである。そんな複雑な社会の中で、自分のある論点を立証するために、若干の実例をさがすことがそれほどむずかしいことではないけれども、非科学的なやりかたと指摘したいと思う。中国の社会科学を携わっている研究者にとっては、必要なはたはいくつかの実例ではなくて、物事の本質と総和である。それを十分把握した上で、観点を形成するこそ、正しい判断を下すことができる。日本から毎日洪水のように流された情報の前に、私たちは注意ぶかく、研究して分析しないと日本を全面的に認識することができないと私は思う。しっかりした資料基礎がなければ、質のいい科学成果が得られないと誰でも知っているが、かならずしもこの面の仕事を重視しているのではない、日本研究事業を一步前進させるために、まず図書や資料の収集と管理を強化すべきである。ここ数年間、各研究機関の図書館の蔵書と資料は多少増加しているが研究者の実際のニーズから考えると、まだまだ満足できない状態である。私たちの考えでは、図書や資料の収集と管理は日本研究事業の重要な一部分であるとみなして、もっと力を入れて、建設しなければならない。将来、全国のそれぞれの日本研究機関の間に日本研究に関する情報ネットワークをつくるために、いまから準備にとりかかる必要がある。これは当面の緊急課題の一つであると強調したいと思っている。

いかにして日本研究者の政治や業務素質を改善し、新しい世代の若手研究者をいち早く養成することは、当面中国における日本研究を推進するカギであると考えている。中国社会科学院日本研究所は1984年9月に全国の日本研究者の実態を調査したことがある。それによると、当時、大体から言えば日本研究者は戦争中に日本を始めとする外国に留学してかえってきた者と新中国の大学で養成された者から構成していた。年齢から見ると、50歳をこえるものは三分の一しめていた。その時から6年間近くすぎたが多く先の先任研究者はあいついで定年になっている。古参研究者はほとんど日本軍国主義が中国を侵略する戦争を体験してきたので、戦前と戦争中の日本を自分の肌で感じている。彼らは理論的知識をもっているだけでなく感性知識をも持っているから比較研究をしやすくして認識が深い。解放されてから新中国の大学で養成された中青年世代の研究者は、いま中国における日本研究の中核として活躍している。彼らはしっかりとした理論基礎と知識を備えている上に、一般的に日本語に不自由がなく、そして、数多くの人々が日本へ研修し、現地観察するチャンスがあたえられている。彼らは戦後の日本に関する知識がわりあいに豊富で

考え方も活発である。中国の日本研究者隊列の構成において、「プロ文革」の10年間によってやられた「断層」は一応中国共産党十一期三中総会以降の10年間の発展で次第にうめられつつある。それにもかかわらず日本研究者の隊列中に、最も必要なのはしっかりした基礎をも中核になっている中年研究者である。新旧世代間の「断層」問題はまだ徹底的に解決されていない。いかにしていち早く日本研究の中堅研究者を養成できるか、これは中国における日本研究のもう一つ緊急課題だと思っている。図書や資料の問題であろうと、人材養成の問題であろうと私たちは長い目で考える必要があると思う。以上にふれた二つの問題は当面解決しなければならない問題だけである。日本研究のすべての問題ではない。紙面の関係でこれらの問題は詳しく述べることを省略する。

中国の日本研究事業の発展にしたがって、多くの学者たちは、これからの日本研究のありかたに強い関心をよせている。日本学とは何か、理論的にこれを研究している方もいる。いろいろな意見があるが、まだ統一された認識になっていない。私自身の考えでは、当前、中国において、日本研究の特徴はマルクス主義の基礎理論を指導原則とし、弁証唯物主義と歴史唯物主義の認識論と方法論を活用して、日本の政治、経済、民族、社会、文化などそれぞれの分野に対して系統的に総合的研究をして、その発展と変化の内在的な法則を解明し、日本を全面的に理解し、認識して中日両国の人民の相互の理解と友誼を促進すると同時に中国の建設と発展に奉仕することである。歴史の段階によって、国家の需要とそれぞれの学科の需要にもとづいて当時の研究重点を確定することはあきらかに、中国における日本研究活動の特徴である。

この問題についてもっと多くの専門家や学者の御意見をきかしてもらいたい。中国の特色を持つ日本学をうちたてることは一つの龐大なシステム工学でだいぶ時間がかかると思うが、日本問題を研究するには、世界でも中国人が最もめぐまれている条件をそなえているので、その見通しが非常にあかるい。全国の日本研究者がよく協力すればどんな困難があっても克服できると思う。名実とも「日本研究大国」になれる日がそう遠くないと信じている。